

街のかかりつけドクター SAPPORO



医療法人 藻友会
いじやま形成外科クリニック
石山 誠一郎 院長
日本形成外科学会認定形成外科専門医
北海道大学形成外科客員臨床講師

各専門医のドクターに
暮らしの中で気をつけること
疑問に思うことを聞く連載コーナー



教えてドクター

ほくろ除去について

コンプレックスにもなる 徐々に大きくなるほくろ

ほくろは、医学的には母斑(ぼはん)細胞性母斑あるいは色素性母斑といふ病名があります。黒いマラソン色素を産生する母斑細胞が増殖したもので、徐々に大きくなる特徴があります。特に顔の正中線附近(おでこ・鼻・あご)のほくろは、40代以降に大きくなりがちのケースが多く、見た目のコンプレックスにつながることもあります。

ほくろの除去の治療法は、 「レーザー」と「切除縫合」

ほくろ除去に際しては、大きさが直径2mm以下で皮膚の比較的浅い場所にあるものであれば炭酸ガスレーザーによる蒸散が適しています。専用機械による特殊な光を肌の表面に直接照射し、皮膚に含まれる水分を蒸散させ、それによりほくろの原因となる母斑細胞を焼き切る治療法です。ほくろが大きく盛り上がり、皮膚の深い場所にも存在している場合は、手術による切除縫合を行った必要があります。

命にかかる 危険なほくろに要注意

ほくろが急に大きくなったり、色や形が変化したりする場合は、皮膚がんの可能性も考えられますので、放置せずに一度形成外科にご相談ください。通常ほくろは良性で、がん化しませんが、一見ほくろのようにも見えるかんがあります。よく小さな初期のものではほくろと見分けることが難しく、医師でも判断に迷う場合があり、注意が必要なほくろは組織を病理検査して診断します。

ほくろなど 皮膚のできものは、 ます形成外科に

私たち形成外科医は、手術が必要な体表面の異常をできる限り外見に気を配りつつ治療することを専門としています。機械的な面のみならず、整面も十分に考慮しながら手術・治療を行います。

ほくろの除去もさうですが、皮膚のできものや傷などをいかにきれいに、傷あとが目立たないよう取つたり治したりできるかは、形成外科医の経験と技量の差が出やすい分野です。確かな知識と技術、きめ細やかな工夫が求められます。治療の相談を希望の場合は、一つの自安として形成外科専門医が在籍する医療機関を選ぶのがいいと思います。

ほくろの除去を希望する方は、治療の効果や各治療法のメリット・デメリット、費用などについてぜひお近くの形成外科へご相談ください。